# 成人前期の価値意識（2）

## 生き方とその揺らぎの質的検討

吉田恭子[1]・栗山容子[2]・大井直子[3]
([1]川越市子育て支援課・[2]国際基督教大学教育研究所・[3]国際基督教大学)

【目的】価値意識は社会・歴史的変化の影響を受けるが，コホート研究によってそのような影響を明らかにする際，コホート内はある程度同質であること，青年期に確立された価値意識はおよそ不変であることを前提としている（e.g., Hitlin & Piliavin, 2004; Roberts & Bengtson, 1999）。一方，個人の経験レベルでは，認知や対人関係の発達と共に学校経験などの身近な文脈の影響を受けており，中学生から大学生を対象にした面接調査で，青年がそれらの経験を統合して価値意識を顕在化させる様子が捉えられてきた（栗山・大井, 2012; 吉田・栗山・大井, 2012）。成人前期は生活環境が大きく変化する時期であり，その変化が価値意識にも反映されると予測される。そのため，現在の生活状況と対象者が価値意識を説明する際の語りから成人前期の価値意識の特徴を検討した。

【方法】大学卒業後 3-4 年の 13 名と 7-8 年の 8 名，計 21 名（男性 7 名，女性 14 名）を対象に半構造的面接を実施した。当調査は大学生を対象に実施したものの追跡調査であり，在学中に参加した卒業生を対象に同窓会事務局を通じて郵送で調査協力を依頼した。協力が得られた卒業生と個別に日程を調整し，学内外の静かな場所で面接を行った。追跡率は 32%であった。対象者の年齢は平均 27.8 歳（25 歳 11 か月～30 歳 10 か月），面接時間は平均 1 時間 15 分（40 分～2 時間 15 分）であった。大学卒業後の経験や現在の生活について尋ねた後，在学中の調査に準じて，生き方とその揺らぎ，友人関係，両親との関係，宗教，職業的価値意識，政治・社会的関心について質問した。そのうち生き方とその揺らぎを中心に，栗山・吉田・大井（2013）のカテゴリを用いて質的検討を行った。

【結果と考察】面接の導入として質問した卒業から現在までの生活状況と価値意識，揺らぎの有無の関連を表 1 に示した。始めに現在の状況によって「就労」と「就学とその延長」に分け，現在は無職や専業主婦であっても，今後も就労を基盤としていくケースは前者に含め，就学を終えているものの司法試験などの準備中であるケースは後者に含めた。「就労」群には，葛藤を経験して既に転職などの転向を経験したケースや今後の転向を検討中であるケースが見られたため，過去の葛藤／転向経験の有無，現在の葛藤／転向検討の有無によって区別した。「就学とその延長」には，「既に就職先が決まって就労見通しのあるもの」と「今後も就学や試験準備を続けていくもの」が見られたため，両者を区別した。「就労」群に社会志向が多く，「就学とその延長」群に自己志向が多かった。現実志向は双方の群で見られたが，葛藤の有無（「就労」群），就労見通しの有無（「就学とその延長」群）によって，その内容に質的差異が見られた。現在葛藤がない群，就労見通しがある群では揺らぎが見られなかったが，現在葛藤がある群と就学継続群で価値意識の揺らぎが存在した。

表 1　現在の状況と価値意識・揺らぎ

| 現在の状況 | | 現実 | | | 自己 | | | 社会 | | | 計 | 揺らぎ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 積極行動 | 安楽・充足 | 日常・生 | 理性 | 努力・達成 | 自己準拠 | 人間関係 | 博愛・貢献 | 社会規範 | | あり |
| 就労 | 転向経験なし、現在葛藤なし | | | 2 | | | | 1 | | | 3 | |
| （含専業主婦） | 転向経験あり、現在葛藤なし | | 1 | 1 | | | | 2 | | | 4 | |
| | 現在葛藤あり | | | 1 | | | | 3 | | | 4 | 1 |
| | 無職 | | 1 | | | | | 1 | | | 2 | 2 |
| 就学とその延長 | 就労見通しあり | | | 1 | | 1 | | | | | 2 | |
| | 就学継続 | | | 1 | 2 | | 1 | 1 | 1 | | 6 | 3 |
| | | 0 | 2 | 6 | 2 | 1 | 1 | 8 | 1 | 0 | 21 | 6 |

また，対象者自身が価値意識を説明する際の語りから，価値意識のきっかけや背景について検討した。成人前期の価値意識の形成・保持には 3 つのパターンが見られた。1 つめは，就労や就学といった現在の環境やそこでの経験に基づいて価値意識を説明するもので，全体の 76%を占めた。2 つめは，就職や就学以外のライフイベントを経験した場合に，その経験に基づいて語るものであった。3 つめは，現在の状況に依拠せず，大学在学中以前からの経過で価値意識を説明するケースであり，信仰や成育環境など特殊な背景を持つ場合は，一貫した価値意識を形成してきている可能性がうかがわれたが，その場合も，価値意識の揺らぎを経験していた。いずれのパターンにおいても，直近の経験に応じて価値志向の形成・保持と揺らぎを経験している様子が明らかになった。